

み来の小さな親友

松岡輝

「お母さんのおなかに赤ちゃんができたよ。」

きよ年のサンクスギビングの時に言われた言葉だ。そのしゅん間、わたしはないた。一人っ子がよかったのに。ぜったいにお母さんとお父さんをとられちゃうと思っただからだ。わたしは、おばあちゃんにそうだんした。

「おばあちゃん、弟が生まれた時どうだった。」

おばあちゃんは、言った。

「弟が生まれる時、おばあちゃんは二才で、いやだったから、全部のしよじを手でパンパンとやぶったよ。でも、大じょうぶだよ。赤ちゃんが生まれたら、かわいいから。」

わたしは、それを聞いて、わたしもしよじをやぶりたい気持ちと本当にかわいいと思えるのかなというふ安な気持ちでいっぱいだった。

お母さんのおなかが大きくなると、赤ちゃんがおなかをけてぽこつとなると聞いて、手を当ててみた。手にぽこつてかんじた時、本当に赤ちゃんが生きてるんだと思っ、ふ思ぎだった。

お父さんから赤ちゃんが生まれたと聞いた時、本当に生まれたんだ。わたしは本当にお姉ちゃんになったのとふ思ぎな気持ちだった。学校の帰りにびょういんに行っ、はじめと和ちゃんに会った時、本当にお母さんは赤ちゃんをうんだんだと思っ。きゆうに妹が目の前にあらわれて、きゆうにお姉ちゃんになっうれしい気持ちとお姉ちゃんになれるかふ安な気持ちがあざっていた。でも、和ちゃんを見ると、手も足も全部小さくてかわかった。手をさわってみたら、ぎゅってにぎってうれしかった。

和ちゃんといっしょに生活してみると、くしゃみがおじさんみたいな大きいくしゃみでおも白い。ねてる時にだっこされると、アニメの小犬みたいにキュンキュン言う。ごきげんでおきてる時、手足をじたばたする。かみの毛がにわとりのとさかみためにま上に立っている。ベッドにねかされると、せ中にスイッチがあるかの様にすぐおきてかいじゅうの様に大なきする。自分を見てわらってくれる様になっうれしい。話しかけると、アーとかウーとかへんじをしてくれるようになった。みんなが何かを食べていると、食べたそうによだれをたらして、自分の手を口に入れてチュパチュパ大きい音を出してすっている。その全てがかわいくて、全しんまで回したくなるぐらい和ちゃんが大好きだ。

大きくなったら、いっしょにピアノをひこうね。いっしょにカードゲームをしようね。いっしょにたくさんおしゃべりしようね。いっしょにたくさん色々な思い出を作ろうね。これから親友みたいな姉妹になろうね。

和ちゃん、わたしの妹で生まれてきてくれて本当にありがとう。大好きだよ。